

子どもの体験のつながりを大切にした保育

阿部裕之*, 下山恵・北條早織・

千葉紅子・高橋文子・渡邊奈穂子・石川幸子・小川恵美子**

*岩手大学教育学部, **岩手大学教育学部附属幼稚園

(平成28年3月2日受理)

1 研究の概要

(1) 研究主題について

遊びの充実のためには、「幼児が様々な人やもののかかわりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、心が動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活が充実するようにすること。」(幼稚園教育要領)が重要となる。

それは、数多くの活動をさせることでも、次々活動を提供することでもない。「幼児が自分で考え、判断し、納得し、行動することを通して生きる力の基礎を身に付けていくためには、むしろ幼児の活動は精選されなければならない。その際に特に重要なことは、体験の質である。あることを体験することにより、それが幼児自身の内面の成長につながっていくことこそが大切なのである。」

(幼稚園教育要領解説)とあるように、幼児の内面の成長につながっていく体験かどうかは重要なのである。

そのためには、一人一人の子どもの体験に目を向け、その子にとっての「体験の意味」を理解し、それがどんな「体験」につながり、内面の成長に結びついていくのかを読み取っていくことが重要だと考える。

一つ一つの体験がつながりをもち、関連し合うことで体験が深まり、遊びが充実していくような保育をめざし、研究主題を「体験のつながりを大切にした保育」と設定した。

(2) 研究の目的

体験の意味や体験の関連性を明らかにしながら保育を構想し、子どもの体験が深まり、遊びが充実するような保育をめざす。

(3) 研究の計画

- 1年次：体験の意味やつながりを読み取り、保育を構想、実践し、記録を蓄積する。
- 2年次：体験がつながりをもち、発達に必要な体験が得られるような環境や援助の在り方を探るとともに、教育課程・指導計画の改善につなげる。

(4) 今年度の研究の内容と方法

- 一人一人の体験の意味や体験のつながりの理解に基づきながら保育を構想・実践し、記録を蓄積する。
- 体験のつながりを捉えた記録の工夫をするとともに、それを事例に整理する。
- 多様な保育カンファレンスの機会を通して、体験の意味やそのつながりについて理解を深め、子どもの体験がより豊かになるための環境や援助について検討する。

2 実践

本園の研究の一例が、次の事例である。

気に入った遊びを繰り返し楽しみ 自分なりに試したり、工夫したりする

(3歳児)

冬休み明け、F児は家庭で楽しんでいた「ピタゴラスイッチ」を園でも教師の援助を支えにしながら自分なりに考えて作り出していった。「ピタゴラスイッチ」という気に入った遊びを心行くまで繰り返し楽しむことを通して、「もの」とかかわる体験を少しずつ深め、自分に対する自信も生まれてきた。そこでの体験の意味やつながりを、主に「もの」とのかかわりに着目して考察した。

事例1 好きな遊びと出会う

幼稚園での「ピタゴラ」との出会い ～積み木を使って～

「ピタゴラやりたい」というF児と一緒に、「ピタゴラ」を作ることにした。F児のイメージするものはどんなものか知りたいと思い「どんな風に作るのかな？」と問いかけると、「こうなって、こうなるの。」と、身振り手振りで斜面やカーブのようなものだとすることを伝えてくれる。しかし、家庭で使っているものと同じ道具がないからか、動き出そうとする気配がなかったため、これまでも度々F児が遊びで使ってきた積み木1個と板積木一枚で斜面を作って見せた。すると「おお！いいねえ！」と、ガムテープを持って来て転がし始めた。最後までまっすぐ転がっていくとうまくいったと言わんばかりに「おお～！！」と喜び、途中で落ちててもその偶然の動きを面白がってきゃっきゃと笑い…ということをししながら、何度も何度も、その斜面で転がすことを楽しんだ。片付けの時間、「明日もやる！」と楽しそうに積み木を片付けた。

【考察】

○動くものの魅力…一本の斜面を転がるガムテープの動きをこの時のF児は十分に楽しんでいるように感じられた。

○家庭から幼稚園へとつながる体験…家庭での体験から「こんな風になりたい」という思いが強く感じられたが、何をどのようにしていったら自分のイメージする「ピタゴラ」を再現できるのか思い浮かばないようだった。そこでこれまで慣れ親しんでいた積み木を提案してみると、「これも使えるんだ」と気付いたり、家庭では体験していないような動きと出会って面白さを感じたりしていた。

【今後に向けた環境の構成や援助】

* F児が今楽しんでいることを存分に楽しめるように支えていくことが第一だと思われるので、シンプルな構成の中にある“偶然の面白さ”

に共感的に援助していく。

* F児が思い描いているものを、積み木や廃材等、園にある様々なものでも作っていただけるのということと一緒に作りながら伝えるなどして、ものとかかわる体験を深めていけるようにしたい。そのことで、更に体験を重ね、徐々に自分なりに作っていく楽しさも味わってほしい。

事例2 新たな素材を通して、

構成する面白さを味わう

「プラスチック段ボール」を使って、 長い「ピタゴラ」を作る

板積木で斜面を作ると滑り落ちてしまうため、ガムテープなどで留められるよう、細長く切ったプラスチック段ボールを数本、環境に出した。プラスチック段ボールは板積木よりも扱いやすかったのか、「もっと長くしよう！」とはりきって話すF児。しかしどうすると長くつながられるのかわからなかったようで、結局1枚だけの斜面のままでガムテープを転がしていた。それでも一回一回、驚いたり笑ったりしながら楽しんでいたのも、教師も一緒に楽しみながら見守ることにした。

まもなくA児も来て、F児が作った斜面で転がし始めた。A児は何度かやってみた後、「もっとこうしたらいいんじゃない。」とプラスチック段ボールを長くつなげていった。角度がつくところには積み木を下に置いて調整して、どのように構成すると下まで転がっていくかを予想しながら作っているようだった。その傍らでF児も「こうするといいんじゃない？」と言いながら、一緒に考えて作っている気分を味わい、満足気にしていた(写真①)。

満足のいく長さになったのか、「よし！」と、ガムテープを転がしてみた。落ちたり、長く転がったり、やはり予想したようにはならないものの、その動きの面白さで二人は笑い合いながら何度も転がしてみていた。

写真①



【考察】

○新たな素材「プラスチック段ボール」…プラスチック段ボールは、必要に応じてテープで貼ることができ、板積木よりも軽い素材であるため、扱いやすく、ぱっと動かして構成していくことにもつながっていたようだった。

○自分なりに考えて構成する気分を味わう…F児や教師が楽しそうにしている雰囲気、ものが転がって予想外の動きを見せる面白さなどが絡み合ってA児もやってみようという思いになったのだろう。A児も加わることで、F児だけの時には生まれなかった動きも出てくることになる。実際は斜面の構成に直接的に関係がないものの、自分なりに考えてやっているという実感がF児の中にはあったように思う。

F児の体験がA児にもつながり、二人にとつての体験が広がったり深まったりすることにつながっていったのではないか。

日によって、長くしたもの、急にしたもの、道がいくつかあるものなど様々なコースを作ったり、ゴール部分にかごや箱などを置いて転がしたものが入るようにしてみたりと、少しずつであるが、自分なりにこうしたいということを試す姿も見られるようになっていった。

【今後に向けた環境の構成や援助】

* 自分なりに考えて様々に構成してみたいという思いも芽生えつつあると思われるので、F児がじっくりと考える時間を保証し、見守ることも心掛ける。また、プラスチック段ボールのように手に取って使いやすく、様々に選んだり組み合わせたりして試せるような素材（廃材、

小さなブロック、転がすもの)を、形や大きさ、重さなどに留意して用意しておく。

* この頃から様々な子がF児の「ピタゴラ」に興味を示してかかわってくるようになるが、同じ場で一緒に楽しむこともあれば、自分のやりたいようにできないことが嫌で、強く拒むこともあった。そこで、一人一人の思いを大事にしながらかかわり、友達と一緒にやることで賑わいが生まれたり、様々に工夫してみたりと互いのよい刺激となっているような時には、橋渡しをするようにする。また、自分一人でじっくりやりたいような時にはそのような場や状況を確保できるように援助する。

事例3 自分なりに考えたり工夫したりして遊ぶ楽しさを味わう

ビー玉、Bブロックとの出会い

「ビー玉を使いたい」というF児の思いに応え、ビー玉と共にビー玉を転がすのに適した窪みがある「Bブロック」を出してみた。

するとF児は、短めにつなげたものを平面に置き、その上でビー玉を転がして「おお〜！」と歓声を上げていた。しばらく平面の状態で繰り返し転がした後、「斜めにした」と話してきた。これまでの体験をもとに自分なりに考えられるのではないかという期待をもちつつ、「どうやったらいいかねえ。」と言葉を返した。すると周りをぐるっと見まわし「そうだ、いいこと思いついた！」とペーパー芯をBブロックの下に置いて斜面を作る。F児がそのように自ら考えて動き出したのが嬉しくて、「それはいい考えだね！」と、教師も声を弾ませながら応じた。

斜面を転がしていると、ビー玉が勢いよく転がり落ちてしまう。それを何度も拾っているうちにまた「いいこと思いついた！」と一つの箱を持って来て、ゴールのところに置いた。(写真②)箱の中に入ると「おお〜！」と喜び繰り返していたが、角度が変わると入らなくなってしまうこともあった。箱の角度を

慎重に調整しては転がしてみている。すると「そうだ！」と、今度は箱をテーブルの淵につけてみる。(写真③) Bブロックの位置を合わせて転がすと「ポトン」といい音が聞こえ、「おお、おおう～！」と声を上げて喜んだ。

写真②

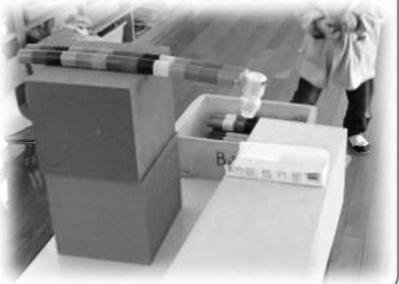


写真③

この日から、Bブロックを使った「ピタゴラ」作りが続く。土台やゴールに使うものを様々に変えてみたり、それによってビー玉の動きが変化の様子をじっと確かめたりするような姿が見られた。

互い違いになるように構成する

互い違いになるコースを作りたいということで、既にF児が作っていた一番上の段を基に教師も一緒に考えながら作った。牛乳パックを切って樋のようにしたものを提案すると、「そうだ、これをこうしたらいいんじゃない？」と、大急ぎで積み木を持って来てそれ乗せ、上からビー玉を転がす。すると、思っていた通りの動きになり、大歓声を上げて喜んだ。



微調整する

「橋みたいになりたい」と作り始める。橋は平らなイメージなのか、最初は平らに置いていた。Bブロックの長さや向きをじっくり見つめながら調整し、ビニールテープを片方に土台として入れて、緩い斜面にする。平らに限りなく近いがビー玉がスタートからゴールへと一定方向に進んで行くようなものを求め、自分なりに考えて試していたのではないか。



法則性を感じ、予想の基に試す

「もっと高くしたい」とペーパー芯を数個重ねて土台にする。1個ずつ増やしては転がしてみている。「高くするともっと速く転がる」という、F児なりの予想があり、1個、また1個と高くしては試しているようだった。これまでの体験の積み重ねから、そういった法則性のようなものがF児の中に感覚的に養われてきているように思われた。



【考察】

○“ビー玉+Bブロック”の動きの魅力…レールを転がるように、窪みをスムーズに進んでいく動きが魅力的で、この遊びが繰り返されることにつながっていると思われる。更に、Bブロックの魅力を以下のように考察した。

第一に、積み木では転がしたものがコースから外れてしまうが、溝があるBブロックは「ゴールまで辿り着くようにしたい」という思いをより実現しやすい。

第二に、Bブロックは積み木に比べて小さく、土台やゴールにするものも小さな物で構成でき、F児が一人で扱っていくには手頃な大きさだったのではないかと。Bブロックを使うようになり、より自分なりに考えながら様々なものを組み合わせて使うようになっている。

第三に、Bブロックの大きさだとテーブルの上を基本に構成できる。F児は1台のテーブルの上でやることにこだわっていたが、「1台のテーブル」はF児にとって、「自分だけの空間」を意味するものだったのではないかと。そのことで安心して夢中になれたのではないかと。

○思考力の芽生え…この頃には、「これも使えるかな」「こうしたらどうかな。」と自分なりに考え試す姿も多く見られた。何度も繰り返し真剣に取り組む中で、斜面の高さと転がるスピードの関係、左右の傾きと転がる方向の関係など、ものが転がる原理や法則性のようなものをF児なりに感覚的に捉えているように思われた。

○これまでの体験の積み重ね…構成の仕方や法則性についてはもちろんだが、自分なりに考えて遊ぶ楽しさや自信をつけてきているという面でも、これまでに「ピタゴラ」をつくったり見たりした体験がF児の中にしっかりと積み重ねられてきていることが伺える。

○「ピタゴラ」を通して育まれた自信…「今日もピタゴラやる！」とはりきって登園することが増えていた。「ピタゴラ」で夢中になって遊ぶこと、笑ったり驚いたり思い切り心を動かすこと、偶然友達とのかかわりが生まれ一緒に心地よさを感じることなど、「ピタゴラ」を通した様々な体験がF児の支えになっていると感じた。

【今後に向けた環境の構成と援助】

* その時々で、「こんな『ピタゴラ』を作りたい」という思いがあるので、F児が自分なりに動いていく姿を見守りながらそれが実現していけるように援助する。家庭でも遊んでいた、「ピタゴラスイッチ」のDVDを見たりしていることが幼稚園での遊びにもつながっているようなので、F児とのやりとりから、どのような素材や構成だったのかを探り、園にあるもので再現できるものはないか一緒に考えたり提案したりしていく。

事例4 ものの動きに関心をもつ

不思議な動きとの出会い ～溝があるフープを使って～

フープの淵に沿うようにビー玉を転がし、その動く様に引き込まれ、じっと見つめていたF児。傍らには同様にじっと見つめる友達がいる。(写真④) 感じている世界を壊さぬようしばらく見守っていると、フープの溝の上でビー玉を転がし始める。最初とは違った動きになり面白かったのだろう、手で押してビー玉を転がしては動く様をじっと見つめる、止まるとまた転がす…ということを何度も繰り返していた。

しばらくして、フープの一部を軽く持ち上げて傾け、ビー玉の動きをじっと見ている。傾けたことで動きが変わったことが面白かったの

か、フープの下にヤクルト容器を置き、ちょっとした傾斜をつけて固定した。一番高くなっていくあたりの溝にビー玉を置き手を離すと、勢いよく下り、ある点を過ぎると徐々にゆっくりになって元の場所近くまで戻って来る。すると逆向きに下り、徐々にゆっくり上る。それを繰り返しているうちに、段々と動きが小さくなって止まる。この一連の動きを食い入るように見つめていたF児は、動きの不思議さにすっかり心を奪われているようだった。(写真⑤)

この後も何度も転がしてみたり、複数個にしてみたり、ヤクルト容器の位置を変えたりして動きの不思議さを味わっているようだった。



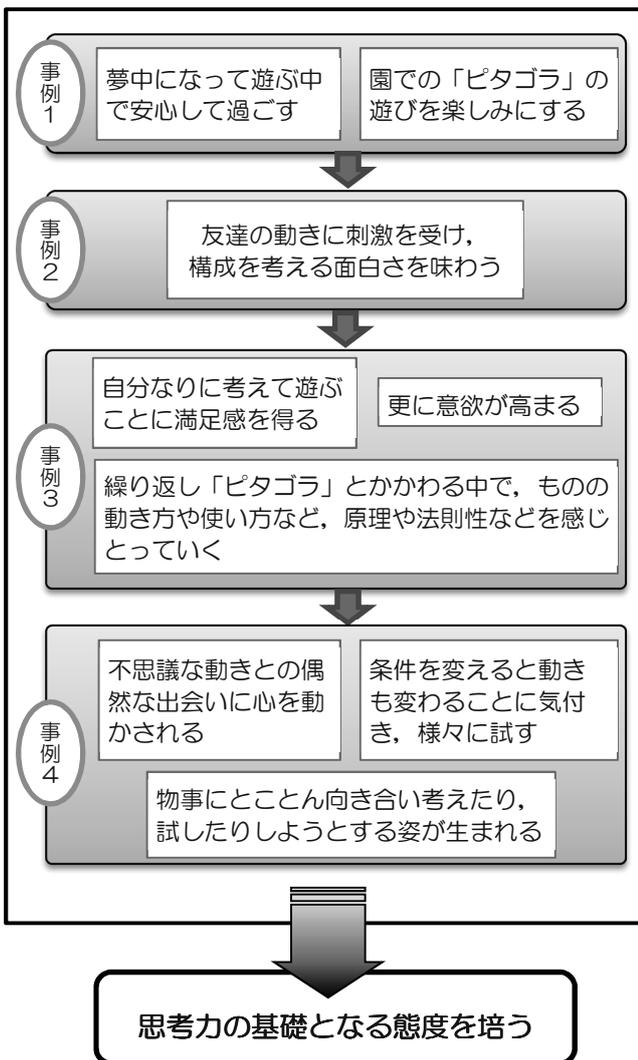
【考察】

○不思議な動きを味わう…これまでの直線的な動きとは違った動きになったことがF児にとっては不思議で興味を引くものだったのだろう。動きを確かめるように何度も同じことを繰り返している中で、新たな疑問やアイデアが湧き、条件を変えてはまた繰り返し、更に疑問やアイデアが生まれる。興味をもったことにとことん向き合い、不思議さを味わう中で、こういった連鎖が次々と起こったのではないかと。

【今後に向けた環境の構成と援助】

* 溝があるフープとの出会いは偶然で、F児の姿は教師の予想を超えるものだった。このように、大人が使いそうと思うもの以外にも活用できるものは様々あるだろう。子どもが面白がって取り組んでいることを敏感にキャッチすると共に、心を動かすような面白い動き、魅力的な動きと出会えるようなものや構成の仕方を、教師ももっと柔軟な発想で考えていきたい。

《4つの事例の体験のつながりを捉える》



3 まとめ

実践事例をもとに、多様な保育カンファレンスの機会を通して、教師同士、互いの考えや見方を突き合わせ、研究を進めてきた。ここに挙げた実践事例の他、一年の実践で得たことは次の通りである。

(1) 幼児の体験の意味やつながりの理解

子どもの体験の意味を多面的かつ深く理解すると共に、過去、現在、未来という時間の流れの中で捉え、体験のつながりを意識して保育を構想し、実践することが、子ども自身が体験をつなげ、体験を深めたり広げたりしながら未来を切り拓いていくことにつながる。

(2) 環境構成の工夫と教師の援助

子どもから遊びが生まれ豊かになっていくような状況を生み出す、環境や援助の工夫が必要である。多様なものと出会い、多様ななかかわりが体験できるよう、ものや場の用意や配置を工夫すると共に、子どもが面白がっていることを敏感にキャッチし、共に面白がったり、偶発的なできごとを取り入れたりするなど教師の柔軟なかかわりが大切である。

(3) 指導計画の立案、改善

子ども自身がそれまでの体験を基に体験をつなげ、主体的に遊びを展開し、充実感を味わいながら学びを深めていくためには、先を見据えて援助の可能性をより具体的に構想する必要がある。研究で得られた成果から、豊かな遊びの状況が生まれる環境や援助のポイントなどを整理し、教育課程・指導計画の改善につなげることが更なる遊びの充実、保育の質の向上につながる。

引用・参考文献

- ・文部科学省『幼稚園教育要領』（平成20年）
- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』（平成20年）
- ・文部科学省『幼児理解と評価』
- ・文部科学省『指導と評価に生かす記録』
- ・榎沢良彦「体験の多様性と関連性を重視した指導」『初等教育資料』（平成25年12月号）東洋館出版
- ・東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎『今日から明日へつながる保育—体験の多様性・関連性をめざした保育の実践と理論—』萌文書林
- ・津守真『子ども学のはじまり』フレーベル館
- ・佐伯胖他『子どもを「人間」として見るということ—子どもとともにある保育の原点』ミネルヴァ書房
- ・国立大学法人千葉大学 全国公立大学附属学校連盟幼稚園部会『多様性と関連性のある体験を通して幼児期の学びを深める実践研究』